The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	KiSS-18の中国人大学生への適用
Author(s)	毛, 新華; 大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2007, 7, p. 55-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7422
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究, 7,　2007

KiSS-18 の中国人大学生への適用 1)

毛　新華(大阪大学大学院人間科学研究科)
大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

社会的スキルに関する研究が盛んに行われている最中、社会的スキル尺度 KiSS-18(Kikuchi's Scale of Social Skills: 18 items)は日本における社会的スキルに関する多くの基礎的そして応用的研究に広く用いられた。さまざまな社会事情により、若者の社会的スキルを研究することが急務となっている中国において、これまで、KiSS-18 を中国の高校生に適用してきた。しかし、適用する対象が限られているという欠点がある。そこで、本研究では、KiSS-18 をより多くの中国の若者に適用するために、中国人大学生に焦点を当て、尺度の適用を試みた。その結果、尺度全体の信頼性が確認され、属性要因による得点の変化パターンおよび他の社会的スキル尺度との相関関係は日本の大学生を対象としていた先行研究の結果と類似していた。ただし、尺度全体の平均得点においては、本研究の中国人大学生は日本人大学生より高くなっていた。また、本研究の中国人大学生を対象とする因子分析では、18 項目は 1 因子構造となり、日本人大学生および中国の高校生の結果のいずれとも異なっている。KiSS-18 の中国人大学・高校生への適合具合を鑑みて、中国文化、中国人の価値観および行動様式などに基づく中国版の社会的スキル尺度を開発する際の重要な参照枠として、また中国における社会的スキルの応用的研究の指標として、KiSS-18 の適用可能性が考えられた。

キーワード: 社会的スキル、KiSS-18、中国人大学生

問題

これまで、「社会的スキル」をめぐる定義が多く存在するなかで、菊池(1988b)は、社会的スキルを「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル」(p.187)と定義した。本研究では、この定義に基づき、社会的スキルを捉える。

特定の個人がどの程度の社会的スキルを有しているかを測定するため、これまで、多くの自己報告式の尺度が開発されてきた。欧米においては、非言語的な感情の表出性を測定するため、Friedman, Prince, Riggio, & DiMatteo(1980)が感情的コミュニケーション尺度(Affective Communication Test: ACT)を開発した(日本語版は大坊(1991))。また、Riggio(1986)は情動的表出、社会的表出、情緒的感受性、社会的感受性、情緒的統制、社会的統制、社会的操作の 7 側面で構成される 105 項目からなる SSI 尺度(Social Skill Inventory)を作成した(日本語版: 榧野(1988))。そして、Goldstein, Sprafkin, Gershaw, & Klein(1980)は若者のための社会的スキルリストを作成した。

日本においては、堀毛(1987, 1988, 1994)の人あたりのよさ尺度(HT-44)や Takai & Ota(1994)の日本的対人コンピテンス尺度(Japanese Interpersonal Competence Scale: JICS)、菊池(1988a, 1988b)の KiSS-18(Kikuchi's Scale of Social Skills: 18 items)などがある。

その中でも、KiSS-18 は特筆に値する。この尺度は菊池(1988a, 1988b)が Goldstein *et al.* (1980)の若者のための社会的スキルリストを参考にして開発したものであり、特に若者にとって必要な社会的スキルを測定するために作成した尺度である。尺度が開発されて以来、菊池(1988a, 2004)および多くの先行研究(e.g., 五十嵐, 2002; 中村, 2000; 和田, 2000, 2001, 2003)では、尺度の信頼性を検討し、また、和田(2001)は尺度の再テスト信頼性も検討している。その結果、いずれも尺度の高い信頼性を確認している。さらに、KiSS-18 は 18 項目と項目数が比較的少なく、簡便に実施することが可能であるため、社会的スキル・トレーニング(social skill training: SST)などの応用的研究場面でも用いられ(e.g., 大坊・栗林・中野, 2000; 津村, 2002, 2003, 2004)、社会的スキルに関する研究に大いに貢献している。このように、KiSS-18 はすでに日本において、幅広い研究で受け入れられている尺度となっている。

一方、文化的観点に基づく先行研究によれば、中国と日本の間には、さまざまな面において、異なる点があり、中国人と日本人の行動様式も異なっている(e.g., 天児, 2003; 村山, 1995; 中村, 1994; 園田, 2001; 末田, 1995, 1998)。一方、両者は同じく集団主義文化(Triandis, 1995)に属し、高コンテキスト文化(Hall, 1976)にあり、類似している部分も多くあるとされている。この点において、KiSS-18 に関しては、通文化的に適用できる社会的スキル尺度として評価されている(Takai & Ota, 1994)。それゆえ、日本の若者を対象とする場合に妥当とされる社会的スキル尺度 KiSS-18 は中国の若者に対しても、適用できる可能性が考えられる。

このような背景を踏まえ、毛(2005, 2007)、毛・大坊(2004)では KiSS-18 を中国の高校生に適用する可能性を探った。その結果、尺度に高い内的一貫性(α=.83)があり、男女差がなく、年齢の上昇につれて得点が上がり、因子構造が日本での結果と似ているなど、オリジナル尺

度との一致が見られた一方、尺度の平均得点が日本の同年齢の対象者の結果より高いものとなっている。

これまで、KiSS-18 を用いて中国人大学生を対象とした研究には、候(2002, 2003)や紫垣(2002)があげられる。ただし、それらの研究では尺度の適切性を吟味せずに中国の大学生に KiSS-18 を用いていた。

そこで、本研究の目的は、毛(2005, 2007)、毛・大坊(2004)の研究をさらに展開し、中国人大学生に焦点を当て、KiSS-18 の適用可能性を探ることである。

方法

調査対象と日時

対象群 1: 2005 年 3 月。中国・大連市にある 3 つの大学の大学生 608 名(有効回答数は 593 名、男子 297 名、女子 290 名、不明 6 名; 文系 280 名、理系 313 名; 平均年齢 21.01±1.37)。

対象群 2: 2006 年 3 月。大連市の 2 つの大学の大学生 442 名(2006 年 4 月に再テスト、有効回答数は 406 名、男子 170 名、女子 236 名; 文系 235 名、理系 171 名; 平均年齢 20.38±1.11)。

本研究では、上記の 2 つの対象群を対象に質問紙調査を実施した。一連の調査において有効であった 999 名のデータに基づき、分析を行う。なお、再テストの検討は対象群 2 の 2006 年の 3 月と 4 月に実施した追跡調査に基づいて行う。

質問項目

本研究で取り入れた質問項目として、調査対象者の基本属性に関するものと社会的スキルに関するものがある。基本属性を問う項目は調査対象者の生年月日、出身地、性別、所属の大学、学部、学年などを含む。一方、社会的スキルを問う項目は①KiSS-18、②感情的コミュニケーション尺度(ACT: 大坊, 1991; Friedman *et al.*, 1980)、③日本的対人コンピテンス尺度(JICS: Takai & Ota, 1994)という 3 つの社会的スキルを測定する尺度によって構成されている。①KiSS-18 の 18 項目に対しては、「自分にどれだけできるかを答える」という教示のもとで、「1. ほとんどできない」から「5. いつもできる」までの 5 段階評定(1～5 点)を、②ACT の 13 項目に対しては、「自分にどれだけあてはまるかを答える」という教示のもとで、「1. 全くあてはまらない」から「9. よくあてはまる」までの 9 段階評定を、③JICS の 22 項目に対しては、「自分にどれだけあてはまるかを答える」という教示のもとで、「1. 全くあてはまらない」から「5. よくあてはまる」までの 5 段階評定を求めた。

Friedman *et al.*(1980)が ACT を開発した際の尺度の内的一貫性を表す Cronbach の α 係数は.77 である。本研究の中国人大学生に適用した際には.69 となった。なお、日本の大学生への適用(大坊, 1991)で得られた折半法の信頼性係数 r=.69 である。また、JICS はもともと日本人の社会的スキルを測るものであるが、高コンテキスト文化および集団主義文化の視点から、中国、韓国などアジア文化圏の国にも適用できると考えられる(Takai & Ota, 1994)。尺度全体は察知能力(Perceptive Ability: PA)、自己抑制(Self-Restraint: SR)、上下関係調整(Hierarchial Relationship Management: HRM)、対人感受性(Interpersonal Sensitivity: IS)、曖昧さへの耐性(Tolerance for Ambiguity: TA; 点数が高くなるほど曖昧さに耐えられない)という 5 つの下位因子から構成されている。

なお、KiSS-18 の尺度内容の中国語訳については、すでに毛(2005)で検討されている。他の 2 つの尺度の中国語訳の検討は日本の大学院に在籍し、在日歴 5 年以上の 3 人の中国人留学生によって行われた。

結果と考察

個人属性との関係

先行研究と比較できるように、本研究では、まず KiSS-18 の性差について検討した。男子大学生と女子大学生の得点では有意差はなかった(t(968)=0.30, *n.s.*)。この結果は、菊池(1994)の日本の大学生を対象と

Table 1 属性要因別の得点および先行研究との比較

本研究					t 検定	菊池の研究(1994,2003)		
属性	カテゴリー	有意差検定	n	得点		n	得点	t 検定
性別	男子	*n.s.*	452	66.10(8.32)	9.51***	83	56.40(9.64)	*n.s.*
	女子		518	65.94(8.14)	9.14***	121	58.35(9.02)	
年齢	高群	7.61***	333	67.16(7.90)[a]	中学生＜高校生＜大学生＜成人			
	中群		313	66.26(7.97)[a]				
	低群		330	64.71(8.58)[b]				

( )内は標準偏差
*** p<.001
異なるアルファベットを付した箇所間には、0.1%水準で有意差があることを示す

する研究の結果と一致する(Table 1)。

年齢の効果を検討したところ、年齢の上昇(年齢の範囲は 17.08-26.25 歳、中央値は 20.67 歳で、平均年齢 20.76±1.31、年齢の分布により、人数を均等に高、中、低の 3 群に分けた)につれて、KiSS-18 の得点が有意に高くなった($F(2, 973)=7.61$, $p<.001$)。多重比較(Tukey 法)を行った結果、年齢の高群と中群のいずれも低群(各群の平均年齢として、高群が 22.22±0.67 歳(n=333)、中群が 20.71±0.40 歳(n=313)、低群が 19.33±0.50 歳(n=330))より得点が有意に高かった(いずれも $p<.001$)。この結果は菊池(2003)で指摘されている「年齢が高くなるにつれてこの尺度の平均得点は高くなる」(p.8)という結果と一致する(Table 1)。

本研究で得た大学生の尺度全体の平均得点は男女とも約 66 点であり、菊池(1994)の日本人大学生を対象とする研究の結果より、男子が 10 点ほど、女子は 7 点ほど高くなっている。t 検定の結果においても、中国人大学生は日本人大学生より有意に高い得点となっている(男女それぞれ $t(533)=9.51$, $p<.001$; $t(637)=9.14$, $p<.001$; Table 1)。

因子分析の結果

中国人大学生の KiSS-18 の尺度の因子構造を明らかにするために、本研究では、先行研究(菊池, 2003, 2007; 毛, 2005)を参考に、共通性の初期値を 1 として、主因子法を用いた、バリマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況から、1 因子構造だと判断された。この結果は日本の大学生を対象とする多くの先行研究(e.g., 菊池, 2003; 佐藤・菊池・畑山, 2004; 津村, 2002, 2003)で得られた KiSS-18 の 3～5 因子の構造と異なっている。

尺度の信頼性

KiSS-18 を中国人大学生に適用した際に、18 項目の内的一貫性を表す Cronbach の α 係数は.82 であった。日本の大学生などの若者を対象に行われた研究(五十嵐, 2002; 加賀谷・布佐・三浦・千田・村田, 2002; 菊池, 1988a, 1988b; 中村, 2000; 和田, 2000, 2001, 2003)で得られた KiSS-18 の Cronbach の α 係数は.83～.88 であるということから、中国の結果は日本と一致している。

さらに、本研究の対象群 2 の再テストデータを用いて、KiSS-18 のテストの安定性を検討したところ、1 回目と 2 回目の結果の間には.84($p<.001$) と高い相関関係が見られた。また、テストの前後においては、尺度の平均得点に変化がなかったため($t(396)=0.62$, $n.s.$)、尺度に十分な安定性があると示された。なお、日本の大学生を対象とする和田(2001)の研究では、調査間隔はさまざま(3-8 ヶ月)であるが、1 回目と 2 回目の KiSS-18 得点の相関係数は.75～.89 である。

このように、尺度の内的一貫性と安定性の視点から、KiSS-18 は中国人大学生に適用した際、十分な信頼性があると同時に、日本の若者との類似性も有する。

他の尺度との相関関係

KiSS-18 を中国人大学生に適用する際の妥当性を検討するために、KiSS-18 と ACT および JICS の 5 つの下位因子との相関関係を検討した。相関係数を Table 2 に示した通りである。その中の KiSS-18 は ACT(.46)、JICS の PA(.45)、HRM(.48)、IS(.47) と中程度以上の相関関係があり、社会的スキルの全般(KiSS-18)での得点の高い人は言語によらないコミュニケーションの表出能力を有すると同時に、他者に対する感受性が高く、相手からの非言語的メッセージを上手くつかむことができ、そして上下関係を上手く調整することができることを意味する。また、KiSS-18 と JICS の TA との相関係数は低い(-.10)が、負の相関関係であることを勘案するならば、社会的スキルが低いと曖昧さに耐えられないと読み取ることができ、妥当な関係であると考えられる。なお、日本で測定された ACT、JICS の各下位尺度との相関係数は Table 2 のようになっており、本研究の結果と類似する。

Table 2　KiSS-18 と他の社会的スキル尺度との相関

		ACT	PA (察知能力)	SR (自己抑制)	HRM (上下関係調整)	IS (対人感受性)	TA (曖昧さへの耐性のなさ)
KiSS-18	本研究	.46*** (n=969)	.45*** (n=972)	.26*** (n=975)	.48*** (n=977)	.47*** (n=974)	-.10* (n=977)
	先行研究	.33a*	.49b***	.30b***	.31b***	.41b***	-.11b*

*$p<.05$; ***$p<.001$

[a]中村・益谷(1991)　n=64

[b]Takai & Ota(1994) n=253

総合考察

本研究では、日本の若者の社会的スキルを測るのに適切だと考えられている尺度 KiSS-18 を中国人大学生に適用した。その結果、尺度全体の信頼性が確認できた。また、属性要因による得点の変化パターンおよび他の社会的スキル尺度との相関関係は日本における大学生を対象とする多くの先行研究の結果と類似している。しかし、尺度全体の平均得点は日本の先行研究で得られた結果より高い。さらに、尺度の因子分析の結果も日本での先行研究と異なっている。

ここで、中国の若者全般への適用および日本の若者との比較という視点に立ち、上記の中国と日本の大学生から得た結果に、中国の高校生に適用した結果(毛, 2005, 2007; 毛・大坊, 2004)を合わせて、総合考察を行いたい。

本研究で得られた中国人大学生の尺度の内的一貫性を表す Cronbach の α 係数は.82 であり、中国の高校生を対象とした値(.83)ともほぼ同じであった。このことから、KiSS-18 を中国の若者に適用する際に十分な内的一貫性があると示唆される。また、日本の若者を対象とした研究(e.g., 五十嵐, 2002; 菊池, 1988a, 1988b)の値と近似していることから、中日両国の若者に類似の傾向があると考えられる。

本研究で得られた中国人大学生の尺度得点に性差がないという結果は中国の高校生を対象とした研究の結果とも一致する。すなわち、KiSS-18 が中国の若者に適用した際、性差がないことが示唆される。一方、日本の高校生と大学生のいずれにおいても、尺度得点に性差がみられない(菊池, 1994)。両国の若者はこの点においては一致していると言えよう。

KiSS-18 の因子分析の結果について、毛(2007)は、中国の高校生(4 因子; 毛, 2005; 毛・大坊, 2004)、日本の男子大学生(3 因子; 菊池, 1993)、そして中国山東省の大学生(5 因子; 候, 2002)の 3 つの対象者間では、因子分析の結果が類似している部分があると結論づけた。しかし、本研究で得られた中国人大学生の 1 因子構造は、上記の 3 者のいずれとも異なる。とくに、本研究と候(2002)の研究の対象者は同じ中国人大学生であるにもかかわらず、因子構造が大きく異なるということは興味深い。大連市の大学生を対象とする本研究と山東省の大学生を対象とした候(2002)の研究の違いを中国の国土の広さや地域の違いに帰属できるならば、今後は調査対象範囲を拡大し検討する必要があるだろう。

本研究における中国人大学生の KiSS-18 の平均得点は日本人大学生より高い。これは、毛(2005, 2007)、毛・大坊(2004)の中国と日本の高校生の平均得点を比較した結果と一致し、いずれも、中国の若者は日本の同年齢の対象者より点数が高くなっている。得点の高低のみを解釈すると、中国の若者の社会的スキルは日本の若者より高いということになる。しかし、Heine, Takata, & Lehman(2000)や北山・唐沢(1995)などは自己評価における欧米人の自己高揚傾向とアジア文化圏の人たちの、とりわけ日本人の自己卑下傾向を指摘した。その上、相川(2007)は、社会的スキルの自己評価アンケートの回答において、日本人は自分が「よくできる」と回答するのを抑制する可能性があることを指摘している。このような可能性を参考に、本研究の自己報告式の測定尺度から得られた中国の若者の社会的スキルが日本の若者の社会的スキルより高いという結論は慎重でありたい。

以上のことより、KiSS-18 の中国人大学への適用の結果は、中国の高校生への適用の結果と全く一致していると言いがたいが、尺度の信頼性や平均得点の特徴などでは一致する部分が多くある。また、日本の若者の KiSS-18 の特徴と比べて、一致する部分(例えば、他の社会的スキル尺度間との相関関係など)もある。このような適応具合により、中国文化、中国人の価値観および行動様式などに基づいて、より幅広い中国人の社会的スキルを網羅する中国版社会的スキル尺度を開発する際の重要な参照枠として、また中国における社会的スキルの応用的研究の指標として、KiSS-18 の適用可能性が示唆された。

引用文献

相川充 2007 社会的スキルの国際比較は可能か 菊池章夫編著 社会的スキルを測る: KiSS-18 ハンドブック 川島書店 pp.166-172.

天児慧 2003 中国とどう付き合うか 日本放送出版協会

大坊郁夫 1991 非言語的表出性の測定: ACT 尺度の構成 北星学園大学文学部北星論集, 28, 1-12.

大坊郁夫・栗林克匡・中野星 2000 社会的スキル実習の試み 北海道心理学会第 47 回大会発表 北海道心理学研究, 23, 22.

Friedman, H. S., Prince, L. M., Riggio, R. E., & DiMatteo, M. R. 1980 Understanding and Assessing Nonverbal Expressiveness: The Affective Communication Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 333-351.

Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J., & Klein, P. 1980 *Skill Streaming the Adolescent: a Structured Learning Approach to Teaching Prosocial Skills*. Champaign: Research Press.

Hall, E. T. 1976 *Beyond Culture.* New York: Doubleday & Company, Inc. (岩田慶治・谷泰訳 1979 文化を超えて TBS ブリタニカ)

Heine, S. J., Takata, T., & Lehman, D. R. 2000 Beyond self-presentation: Evidence for self-criticism among Japanese. *Personality and Social Psychology Bulletin,* 26, 71-78.

堀毛一也 1987 日本的印象管理様式に関する基礎的検討(1)－社会的スキルとしての人あたりの良さの分析－ 日本社会心理学会第 28 回大会発表論文集, 39.
堀毛一也 1988 日本的印象管理様式に関する基礎的検討(2)－「人あたりの良さ」と日本的対人関係－ 日本心理学会第 52 回大会発表論文集, 254.
堀毛一也 1994 社会的スキルを測る 人あたりの良さ尺度 菊池章夫・堀毛一也編 社会的スキルの心理学 川島書店 pp.168-176.
五十嵐祐 2002 CMC の社会的ネットワークを介した社会的スキルと孤独感との関連性 社会心理学研究, 17, 97-108.
榧野潤 1988 社会的技能研究の統合的アプローチ－SSI の信頼性と妥当性の検討－ 関西大学大学院 人間科学 社会学・心理学研究, 31, 1-16.
加賀谷聡子・布佐真理子・三浦まゆみ・千田睦美・村田千代 2002 新人看護婦の社会的スキル 岩手県立大学看護学部紀要, 4, 77-82.
菊池章夫 1988a Social Skill 尺度の作成 東北心理学会 42 回大会発表 東北心理学研究, 38, 67-68.
菊池章夫 1988b 思いやりを科学する 川島書店
菊池章夫 1993 社会的出会いの心理学 川島書店
菊池章夫 1994 社会的スキルを測る KiSS-18 のこと 菊池章夫・堀毛一也編 社会的スキルの心理学 川島書店 pp.177-183.
菊池章夫 2003 社会的スキルを考える 教育と医学, 51, 4-10.
菊池章夫 2004 KiSS-18 研究ノート 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 6, 41-51.
菊池章夫 2007 KiSS-18 の構成 菊池章夫編 社会的スキルを測る: KiSS-18 ハンドブック 川島書店 pp.23-36.
北山忍 唐沢真弓 1995 自己: 文化心理学的視座 実験心理学研究, 35, 133-163.
候桂芳 2002 中国における一人っ子大学生の社会的スキル－非一人っ子との比較－ 安田女子大学大学院文学研究科紀要, 7, 73-82.
候桂芳 2003 中国における一人っ子大学生の社会的スキルと親の養育態度の関係－非一人っ子との比較－ 安田女子大学大学院文学研究科紀要, 8, 181-196.
毛新華 2005 社会的スキル測定尺度 KiSS-18 の中国人への適用 対人社会心理学研究, 5, 85-91.
毛新華 2007 KiSS-18 の中国人への適用に関する検討 菊池章夫編 社会的スキルを測る: KiSS-18 ハンドブック 川島書店 pp.107-122.
毛新華・大坊郁夫 2004 社会的スキル測定尺度 KiSS-18 の中国における適用可能性に関する検討 日本社会心理学会 45 回大会発表論文集, 282-283.
村山孚 1995 中国人のものさし日本人のものさし 草思社
中村晃 2000 自己愛と社会的スキル、および孤独感との関係 日本教育心理学会 42 回総会発表論文集, 558.
中村真・益谷真 1991 感情的コミュニケーション能力と社会的スキル 日本社会心理学会第 32 回大会発表論文集, 318-321.
中村治 1994 日本と中国、ここが違う 徳間書店
Riggio, R. E. 1986 Assessment of basic social skill. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 649-660.
佐藤静香・菊池奈緒子・畑山みさ子 2004 大学初期の適応に及ぼす社会的スキルの影響 東北心理学会 58 回大会発表 東北心理学研究, 54, 35.
紫垣純子 2002 中国大学生の向社会性の発達における社会的スキルの効果 安田女子大学大学院文学研究科紀要, 7, 83-94.
園田茂人 2001 中国人の心理と行動 日本放送出版協会
末田清子 1995「面子」の概念の違いとそれによるコミュニケーション・スタイルの違い: 中国人と日本人 ヒューマン・コミュニケーション研究, 23, 1-14.
末田清子 1998 中国人学生と日本人学生の「面子」の概念及びコミュニケーション・ストラテジーに関する比較の一事例研究 社会心理学研究, 13, 103-111.
Takai, J. & Ota, H. 1994 Assessing Japanese Interpersonal Communication Competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 224-236.
Triandis, H. C. 1995 *Individualism and collectivism*. Boulder: Westview Press, Inc. (神山貴弥・藤原武弘編訳 2002 個人主義と集団主義: 2 つのレンズを通して読み解く文化 北大路書房)
津村俊充 2002 ラボラトリ・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果－社会的スキル尺度 KiSS-18 を手がかりにして－ アカデミア(人文・社会科学編), 74, 291-320.
津村俊充 2003 ラボラトリ・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果 日本社会心理学会第 43 回大会発表論文集, 456-457.
津村俊充 2004 ラボラトリ・メソッドによる体験学習の効果に関する研究－社会的スキル尺度 KiSS-18 と学習スタイル得点の変化より－ 日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集, 594-595.
和田実 2000 大学生の性交経験と個人的背景要因および心理的特性との関連－性交経験者、潜在的未経験者、確固たる未経験者の比較－ 思春期学, 18, 273-281.
和田実 2001 大学生の性に対する態度と性行動の関係に関する縦断的研究 思春期学, 19, 210-218.
和田実 2003 社会的スキルとノンバーバルスキルの自他認知と心理的適応との関係 カウンセリング研究, 36, 246-256.

註

1) 本研究の一部は日本パーソナリティ学会第 15 回大会(2006 年 於東京富士大学)にて発表された。

Applicability of KiSS-18 to Chinese university students

Xinhua MAO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)
Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

In the boom of studies of social skills, a social skill scale named Kikuchi's Scale of Social Skills 18 items(KiSS-18) which is used in basic and the applied studies became popular in Japan. Previous studies had suited the KiSS-18 to Chinese senior high school students(CSHS) because the social skills of Chinese youths should be studied at once due to varying social circumstances of China. However, it is less than adequate to suite KiSS-18 to CSHS when applying this scale to a wider range of Chinese youth. To solve this problem above, in this research, KiSS-18 was suited to Chinese university students(CUS). As a result, high reliability(α=.82) of scale, score fluctuations based on the basic attributes(e.g. sex, age) and correlation between KiSS-18 and other social skill scales were confirmed. Moreover, these results were similar with previously reported results of Japanese university students(JUS). However, the average score of the CUS in this scale is much higher than the average score of JUS. Furthermore, the single-factor structure of CUS was different not only from the composition in JUS, but also from CSHS. In viewing the applicability of KiSS-18 to CSHS and CUS, we think that the scale can help us to develop an original social skills scale based on Chinese culture, Chinese values and behavior pattern, and also can be used as a reference point in our applied studies for Chinese youth in the future.

Keywords: social skill, KiSS-18, Chinese university students.